前年度までの研究開発の概要

平成15年度からスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール指定を受け、研究開発課題の解決に向けて生徒の英語学習へのモチベーションが高まるように教師が仕掛けていくという方策、モチベーション・ストラテジーを実施してきた。それは、アクションA、アクションB、アクションCからなる。

アクションAは、授業以外で英語とふれる機会を増やすための取り組みである。これらの取り組みにより、生徒が英語についての興味・関心を高めていくことが期待できる。主な実施事項としては、イングリッシュ・ランチタイム、昼休み英語放送、イングリッシュ・ラウンジの利用、インターネット活用、講演会、英語関連施設訪問などである。

アクションBは、授業以外で英語で表現する機会を増やすための取り組みである。これらの取り組みにより、生徒が自ら英語で表現しようとしていくことが期待できる。主な実施事項としては、英語集中プログラム、英語プレゼンテーション、校内英語新聞の発行、英会話ソフトの活用などである。なお、ニュージーランド（以下、ＮＺ）語学研修もアクションBにおける主たる実施事項であり、昨年３月末に実施した研修では、プロジェクト学習的な内容や英語での学校紹介ビデオ作成を盛り込んで進めた。

アクションCは、授業において生徒の学習活動を効果的に仕組んだ授業改善の取り組みである。これらの取り組みにより、生徒が英語を学ぶ意欲を高め積極的に使う態度を見せることが期待できる。主な実施事項として、教員研修、授業公開を推進し授業研究を深化させ、授業改善の視点を明確にし、指導方法を工夫するなど授業改善に取り組んできた。

それらの取り組みによって、後述するような成果や課題などが明らかになってきた。

○　アクションAについて

生徒は、英語の授業において英語にふれてはいるが、それで十分とは言えない面がある。授業以外でも、学校において英語とふれる機会を増やす必要がある。それが、生徒が英語についての興味・関心を高めていくことにつながると考える。実施事項の概要は以下のとおりである。

第一年次より、多目的教室をイングリッシュ・ラウンジ（旧名称はイングリッシュ・サロン。第二年次に名称変更）とし、生徒が昼休みや放課後などにおいて、英語雑誌や英字新聞の閲覧、インターネット検索をできるようにするなど、ハード面を整備した。ＡＬＴや留学生と昼食を食べながら気軽に英会話を楽しむイングリッシュ・ランチタイム、昼休みに英語の音楽を流したりＡＬＴなどによる英語放送を定期的に実施した。また、英語に関連する施設を数回訪問したり、英語に関連する講演会等を実施するなど、ソフト面でも生徒が英語をより身近なものととらえられるようにした。そのなかで、教師もかかわりながら支援を行い、生徒の英語への興味・関心が高まりつつあるという成果が得られた。なかでも英語関連施設訪問は、英語でOutputする楽しさも経験し、英語を学びたいという意欲を高めるために大いに役立ったという結果が実施後の質問紙調査で得られた。また第二年次には、イングリッシュ・ラウンジ利用者やイングリッシュ・ランチタイム参加者をより一層増やすために、生徒の興味・関心を的確に把握して知的好奇心を刺激するようなものにしていこうと、実施内容の充実に努めてきている。今後は、アクションB及びCにおける取り組みでよりよい効果を生み出すことを可能にするため、特にアクションCとの有機的な結びつきについて、工夫しながらより研究を深めていく必要があると考える。

○　アクションBについて

生徒が英語で表現しようとするには、その機会は多いほどよいであろう。英語の授業において英語で表現する機会はあるが、多いとは言えない面がある。授業以外でも、学校において英語で表現することを多くする機会を増やす必要がある。しかしただ機会を与えるだけでなく、実際に英語が使われる場面を想定した的確な場面設定も必要となる。それが、生徒が自ら英語で表現することにつながっていくと考える。実施事項の概要は以下のとおりである。

第二年次においては、生徒による校内英語新聞をＮＺ姉妹校生徒の短期受入時に合わせて発行するなど、特定の時期での実施に工夫を試みた。本校生徒がＮＺ短期留学生徒を歓迎する気持ちなどを留学生達に伝えることで、生徒の達成感もふくらんだと思われる。また英語で表現する機会を与えても、英語を苦手とする生徒がしり込みしてしまわないようにする工夫が必要であろう。英語プレゼンテーションについては、第一年次では、１、２年生全員がスピーチをする発表会を各クラスで行ってきた。テーマを自分で自由に

選べるようにすることで、どの生徒もテーマへ興味・関心をもって準備に当たるとともに、発表時には英語に苦手意識を持つ生徒もそれぞれ英語を使うことができる喜びを感じることができた。さらに、各クラス代表等が学校全体にその成果を披露する校内プレゼンテーションを第一年次の３月に実施し大盛況であった。第二年次においても同時期の実施を予定している。British Hillsでの英語集中プログラムには第一年次、第二年次とも約80名の生徒が参加した。ネイティブ・スピーカーと英語で会話できることの喜びを味わい、英語を使用することへの積極性が高まった。ＮＺ語学研修は毎年３月末に実施しているが、第一年次には参加生徒が事前研修としてグループごとに課題を設定して追求するプロジェクト学習に取り組んだ。現地で課題に合わせたリサーチ活動ができるよう、事前研修でも積極的に英語を使おうという姿勢が見られ、同時に進めている英語での学校紹介ビデオの作成のなかでも、本校の特徴などを紹介するために表現を工夫するなど、意欲的な実践ぶりであった。プロジェクト学習は今後発展させて実施を予定しているが、その内容や方法を検討していく必要がある。

○　アクションＣについて

生徒が学習者として、教師の指導の下に学習目標を達成していこうとする場が授業である。したがって、授業においては、教師が生徒の学習活動を効果的に仕組み、そのなかで学習成果を獲得できるようにしていくことが重要となる。そうした授業改善の視点を明確にし、アクションＡ、アクションＢをとおして高まりつつある生徒の英語学習への意欲をさらに高めていくための授業を目指し、さらなる工夫が必要となる。その結果として、生徒の英語を学ぶ意欲が高まり積極的に使う態度を育成することに役立ち、それが英語力の向上につながっていくと考える。実施事項の概要は以下のとおりである。

第一年次と第二年次での４回のSELHi運営指導委員会、第一年次の文部科学省によるSELHi実地調査、第一年次と第二年次での県教育委員会主催によるSELHi研究協議会等の機会をとおして、それぞれの立場から研究開発の方向性、研究内容及び方法についての助言をいただいた。県教育委員会主催によるSELHi研究協議会では、SELHiの普及も意識し、複数の授業者（第一年次４名、第二年次８名）が授業改善をめざした公開授業を教員対象に行った。第二年次の県教育委員会主催によるSELHi研究協議会では近隣の中学校英語教諭にも参加を呼びかけ実施した。これにより他校の高校教員はもちろん中学校教員との情報交換も行われ、SELHi事業への理解が深まった。

また、他校SELHi公開研究会への参加（千葉県立成田国際高等学校、京都府立嵯峨野高等学校、群馬県立中央高等学校など）やSELHi先進校視察（滋賀県立米原高等学校、大阪府立千里高等学校、目白学園高等学校など）をとおして情報収集にも努め、授業改善へのヒント等を得てきた。また視察の受け入れも行った。

さらに第二年次においては、大学教授等を招いての教員研修を定期的に実施し、専門的立場から指導方法や評価方法等について助言をいただいた。それらの研修成果を英語科教員が各自の課題と関連づけながら授業へ取り入れ、授業改善を進めている。また、毎週１人ずつ時間を設定して授業公開を実施している。授業公開後、授業参観メモやＶＴＲ等を用いて研究討議を行っていくなかで、互いの指導法の良さや学習活動の生かし方を意識するようにもなってきた。今後さらに科目間の連携を考慮し、各科目の重点事項を整理し、題材や教材の工夫、指導方法及び指導内容の研究を深めていきたい。また、生徒の発言を引き出すための授業展開、英語コミュニケーションにおいて自分の考えを発信する場面の工夫をさらに進めていきたい。

第三年次（平成17年度）の研究開発においては、これまでの研究を深化させ、アクションＡ、アクションＢ、アクションＣそれぞれにおける成果と課題をさらに分析し、それらを生かして研究開発をすすめていきたい。